せん。其れがお氣の毒ゆへ今此の久七が一時拜借をして置きましたら、若し此處を發掘なされても證據さいなければ御咎は御座りません。それで久七が拜借に參りました」

と言譯をしながら土を取り除け、棺桶の蓋を取りますと、手には水晶の念珠を掛けて周圍には着物が詰め込んで御座ります。着物を引張り出しまして、懷中へ手を入れますと手先に觸りました縮緬の財布、グツと引張つたんで財布の紐がお孃さんの首へ掛つて居りましたので首が上向いた機會にお孃さんが、

「ウーン、ウーン」

と呻つた久七は吃驚しました。

「ア、南無阿彌陀佛……南無阿彌陀佛……。孃やん何卒迷はず成佛を遊ばすやうに、決して私は泥棒に來たのぢや御座りまへん」

「誰や——何方や、妾の居間へ來るのは嫌ェ」

「へェ……久七で御座ります。どうぞ孃やん迷はず成佛遊ばすやう、南無阿彌陀佛……」

「そう云ふ聲は久七や、此處は何處ェ」

「へェ……こ……こ……此處は大雲寺の墓原で御座ります……」

「ア、怖わ、何で恁んな淋しい處へ妾を連れて來たの」

「孃やんあんた死んでゞおましたんや」

「嘘、久七死んだ者がものを言ふかいな」

「そんなら孃やんあんた蘇生なはつたんや、此樣な目出度い事は御座りません。チツトモ早うお宅へお歸り遊ばせ、旦那さんもお家さんもお喜びで御座ります」

と抱へて上へあげました。

「わたし、內へ歸るのん嫌ェ」

「そら又、なんでゞ御座ります」

「わたし死んだんなら、內へ歸つたら世間のお方が紺田屋の娘は一遍死んで蘇生つたと云はれるェ。それより妾を此儘何處へなりと連れて行てお呉れ。お願ひや……」

「そんなら孃やん、お父さんやお母さんは」

「久七お前となら、何の樣な苦勞をしても大事ない」

此のお孃さん死んだのではなかつたので糝粉餅を咽喉へ詰めて居りました。それを死んだと思ふて葬式を致しましたが、財布の紐を引つ張つた拍子に糝粉餅が咽喉を通りまして蘇生を致しました。久七に以前からお孃さん戀煩いをして居りましたんで。

「御勿體ない、御主人樣のお娘御を連れまして逃げるといふやうな事は……」